

お聞きしたいと思います。曲田先生、1分いいですか。

○曲田 文化財にしないといけないという話の前に一言紹介します。私はたまたま教育学部に所属しておりますけれども、いろいろな保存運動と同時に住まい・まちづくり運動をやっています。そのひとつに十数年来、新居浜の高校生と付き合っていることもありまして、子どもたちが新居浜の近代化遺産の調査をやり始めたんです。どういうふうに表現したらいいかというのが当初はありまして、一生懸命、調査し、昔の住友関連のお年寄方にヒアリングし、整理して、ネットで配信する、冊子を作るとか、いろいろやってきました。彼らは学習するうちにとても賢くなりまして、様々な講座の先生として引張られるようになってしまいました。そして、高齢者の学習講座の講師として招かれるようにもなりました。お年寄りの方々も、孫のような子どもたちからこういうことで教えてもらおうと、とてもいい交流ができるわけです。学習によるそれぞれの双方向的な触れ合いができると子どもたちもおじいさん、おばあさんに質問してもらってうれしがられるとさらにやって行こうという気になる。私自身はやはり愛されるとか、何かといろいろなことを知る、学習する、それを共に行うということがとても大切な営みではないかと思っております。

ご質問の答えを忘れていましたが、J.H. モーガンの建てたちょっと不思議な松山東雲学園正門の建築物をもう少し大事にしていってほしいなということを個人的には思っております。

○岡崎 ありがとうございます。やはり子どもさんへのそういった広がり感というのが希望を持たせてくれますし、わくわく感もあっていいお話を聞かせていただいたと思います。同じような部類で二村先生どうですか。一言、短く。

○二村 これは私が言ってしまうといい分かりませんが、昨日、打ち合わせで伊東先生が、基本的にこの報告書に載っているものは前提として登録になる可能性が高いものではないかというお話をされておりました。私もそう思っておりますので、それ以上の可能性があるのではないかと私が直感的に思ったものを1つ言います。もちろんいろいろあるわけですが、浦和盛三郎家がいいのかなと私はちょっと思っていて、直感的に最初に見たときにこれはすごいなと思いました。1つは北海道のニシン番屋との類似性という部分でも面白いです。今話題の

尖閣諸島で明治30年代にも福岡の八女の方がマグロ節作っているんですけど、マグロ節をそれよりも前の明治20年代にも始めていて、その様子がよく残っています。この様子が基本的には蚕室に似ています。焼津にあるマグロ節をつくる急造庫という新しい昭和30年にできてるものとすごく似ていて、それが明治20年代にできているというところで結構面白いなと思います。そういう点ではこれはもっと上を目指していいのではないかなと思うものの1つです。

○岡崎 ありがとうございます。確かに由良半島の突先にある辺びなとところにあります浦和盛三郎さんの魚類製造家屋、まさにこれは犬伏武彦先生の発掘したあらたまの物件でありましたが、そういったことの将来性をおっしゃっていただきました。そういった幾つかのこれまでの流れ、いろいろな話が飛び出してまいったわけですけども、瞬く間に1時間あまりが過ぎまして、伊東先生、総括でコメントをいただく時間になってまいりました。時間の関係もあって申し訳ございませんが3分で大丈夫ですか。

○伊東 総括といっても皆さんがすでに言われたことで基本それでいいと思うのですが、ちょっと違う言い方をすると、今回いろいろな案が出ました。主体別にいうと、行政とか大学とか企業とか博物館とか住民に、それぞれやるべきことや役割が提示されました。先ほど、県だったら自主条例を作ってほしいとか、大学だったらこういったことをしていただくとか、企業は企業で企業目線がいろいろあると思うので、それぞれの主体で「やるべきは今」なのでやってほしいという期待はあります。

二村先生からB級グルメではないですけど、「ここにしかないもの」とあったのですが、やはり地域地域で独自のものを大切にするというのは、ある意味オンリーワンですよ。日本唯一でしょうし、恐らく世界唯一かもしれませぬ。そういうことで「オンリーワンを目指す」というか探すというのは非常に大切だと思います。

あと、「使い続ける」という話がありました。近代化遺産というのは基本的に身近な文化財ですから、日常生活の生業の中で成り立つものです。基本はなにしろ使い続けることです。それが生産活動だったらお金が入って回ってくるのです。しかし社会システムが変わって生産活動が切り離されてしまったときは、機能転換を考えなければなりません。そのときは知恵を出しあってやって